

具体的に書け-作家としてのノラ・エフロン-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院教養デザイン研究科 公開日: 2014-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 斎藤, 英治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/16419

【特集 かく】

具体的に書け

——作家としてのノラ・エフロン

斎藤 英治

1 多才なアーチスト——ノラ・エフロン

ノラ・エフロンといえば、真っ先に思い浮かぶのは、やはり映画監督・脚本家としてのイメージだろうか。ロブ・ライナー監督の『恋人たちの予感』（一九八九）のために彼女が書いたシナリオは、アカデミー賞脚本賞にノミネートされただけでなく、それ以後のハリウッドのロマンチック・コメディに少なからぬ影響を与えた。往年のハリウッドのスクリーンボール・コメディの伝統を、現代に蘇らせたその功績は大きいと言えるだろう。

映画監督としても、二作目の『めぐり逢えたら』（一九九三）と、五作目の『ユー・ガット・メール』（一九九八）は一般の観客から支持され、一時はヒット・メーカーと目されていた。その後は、正直に言ってパッとしない作品がつづいたが、二〇一〇年の『ジュリー&ジュリア』は彼女の代表作と言っていい秀作で、演出家としての才能に初めて脱帽させられた映画だった。

その一方で、彼女はユーモア作家としても知られている。二〇〇六年に出版されたエッセイ集 *I Feel Bad about My Neck* (Black Swan, 2006) は、老化という深

具体的に書け——作家としてのノラ・エフロン

刻な話題を小気味よく綴ってベストセラーになった。とくに、そのなかの老眼鏡をめぐるエッセイはケツサクで、多くの読者の共感を得た。悲惨な現実でも、あくまでコミカルな視線を保つところが、ノラ・エフロンのユーモリストとしてのスタンスと言えるだろう。彼女はもう一冊『*I Remember Nothing* (Alfred A. Knopf, 2010)』というエッセイ集も出している。これはタイトルにも端的に示されている通り、健忘症というか、加齢とともに悪化する「物忘れ」をめぐるエッセイが中心だ。多少、前作よりも深刻な現実が影を落としているが、これもユーモア・エッセイ集だ。

また、これは少し前の話になるが、彼女は自分の離婚体験を綴った小説 *Heartburn*（映画『心みだれて』の原作）を一九八三年に発表している。彼女は、『大統領の陰謀』で知られるジャーナリスト、カール・バーンスタインと結婚していたが、二人目の子どもを妊娠中に彼の浮気が発覚したのだ。その悲しい体験を、自虐的なユーモアをこめて描いたこの小説もベストセラーになっている。

さらに、彼女は二〇〇〇年ごろから、劇作家としても活躍をはじめ、リリアン・ヘルマンとメアリー・マッ

カーシーの喧嘩を題材にした *Imaginary Friends* や、（こちらは詳細を知らないのだが）*Love, Loss, and What I Wore* という芝居を書いてヒットさせている。

英語に “versatile”（多芸な、多才な）という形容詞があるが、ノラ・エフロンはこの「多才な」という形容詞がよく似合う人物と言えるだろう。逆に言えば、彼女の本領が何かを決めるのはけっこう難しいと言える。多方面で活躍していることは、とりもなおさず、映画を除けば、ひとつの分野で大きな業績を上げていないことを意味するからだ。もしかしたら、飽きっぽい性格なのかもしれない（結婚も三回しているし）。そのため、彼女は、ひとつの分野の専門家というより、むしろ多才な文化的なセレブとして一般に認識されてきた感がある。

ところで、彼女は多様な領域で活躍してきたが、そこに一貫して流れる彼女の特質を見出すことは可能だろう。真っ先に言えるのは、彼女がコメディ作家、あるいはユーモリストだということだ。彼女の映画脚本や監督作品は、最初の脚本『シルクウッド』（一九八三、アリス・アーレンとの共作）を除けば、ほぼみなコメディだと言っている。『シルクウッド』は、ブルトニウム工場で被爆し、後に不審な死を遂げた女性カレン・シルクウ

ツドを扱った作品で、ノラ・エフロンの持つ硬派な面が出た映画だった。しかし、その後の多くの映画は、シャレタセリフと鋭い風刺が持ち味のコメディであり、いつも笑顔の著者近影の写真と同じように、笑顔で世界を見ている印象がある。それは脚本家として成功する前、ジャーナリストとして活躍していた時代からの彼女の特質でもあった。

また、もう一つの特徴は、彼女が持っていた現代の社会風俗への関心だろう。たとえば、トム・ハンクスとメグ・ライアンが共演した映画『ユー・ガット・メール』には、その恋愛物語の背景として、巨大書店が小さな書店を駆逐していった一九九〇年代の社会状況が描かれていた。当時、ニューヨークではバーンズ&ノーブル書店の本店が問題視されていて、趣味のいい昔ながらの本屋が消えてしまうのではないかと懸念が表明されていたのだ。また、この映画では、当時流行し始めたパソコン通信も、ラブ・ストーリーの重要な小道具として新鮮に使われていた。このような新しい社会の変化や現代の流行を積極的に取り込む姿勢が、彼女の持ち味のひとつだと言える。

そう言えば、『ジュリー&ジュリア』のヒロインも

具体的に書け——作家としてのノラ・エフロン

ロガー (Roger) という設定だった。映画の舞台は、九・一一の少し後と思しき時期で、仕事の悩みで疲れきったヒロインのジュリーは、自分の人生を立て直すために、夫にも励まされて、好きな料理をめぐるブログを始めることにする。尊敬するジュリア・チャイルドの『フランス料理の真髄』という大著に載っている五〇〇を超えるレシピを、じっさいに作ってブログで紹介する計画を立てるのだ。映画は、この悩める現代女性と、ジュリア・チャイルドの人生をバラレルに描いていくという大胆な構成になっていたが、それはともかく、ブログという新しい通信手段をさっそく映画に活かすところが、新物好きのエフロンらしいと言える。

繰り返すが、このような最新風俗への関心は、ジャーナリストのころからの彼女の関心事でもあり、そういった彼女の好奇心が、彼女の映画に、ほかの映画人にはあまり見られない新鮮さを与えてきたと思う。

さらにもうひとつ、ノラ・エフロンの多様な領域に共通するものを挙げれば、彼女が基本的にはライター（作家）だという事実だろう。監督もするけれど、彼女はむしろ脚本家としてより多くの敬意を集めてきたと思う。たとえば、最近のロマンチック・コメディ『ステイ・フ

レンズ』(二〇一一)なども、脚本家のノラ・エフロンへのリスベクトにあふれる恋愛映画だった。

つまり、他分野にまたがるノラ・エフロンの仕事は、“Writer”という言葉に集約できるだろう。じっさい、彼女は、書くことで自分や社会を表現する女性なのだ。

フィクション、エッセイ、芝居、映画、コラム……活躍の場所はさまざまに移っていったが、その居場所はあまり変わらなかったとも言える。机のタイプライターの前に座ること……そこが彼女のホームグラウンドだったのだ。

じっさい、彼女はいくつかの文章で、学生時代(あるいは子供のころ)から、ジャーナリストになるのが自分の夢だったと告白している。ここでは、そんな彼女のライターとしてのキャリアに焦点を当ててみたい。

2 ジャーナリストとしての新人時代

ノラ・エフロンは、一九四一年に、ハリウッドの脚本家コンビだったヘンリー&フィービー・エフロンの夫婦のもとに、ニューヨークで生まれた。四歳のときに、ハリウッドへ移住。その後、大学は名門のウェレズリー女子大に進学している。高校でも、大学でも、学内で新聞

を作っていたというから、そのころからジャーナリストになるのが将来の夢だったようだ。

彼女は卒業後、ニューヨークに出ると、すぐに『ニューズウィーク』誌で「メール・ガール」として雇われている。最初から『ニューズウィーク』誌に入れるとはすごい、と羨ましく思うかもしれないが、当時の『ニューズウィーク』編集部は、野心的な若い女性にとって決して将来性のある職場ではなかったらしい。「メール・ガール」というのも、文字通り、山のような郵便物を分けし、各部署に届けるだけの単純作業だったという。その後、彼女は「クリッパー」という仕事に昇進した。ただし、これも全国の新聞の記事を、各部門(経済部、社会部、文化部、スポーツ部、等々)ごとに切り抜き、それを各部署にまわすという作業だった。これはたいへん骨の折れる重労働だったというが、ノラ・エフロンによれば、この作業のおかげで、さまざまな各地の新聞を詳しく知れるようになったということだ。

さらに、彼女は次に「リサーチャー」に昇進した。これはなかなか有望そうに聞こえる職名だが、つまるところ、記事の校正、つまり記事の文章を一語ずつチェックするのが仕事だった。人名のつづりを確認したり、引用

された数値に間違いがないか調べたり……そして記事に何らかのミスがあれば、彼女たちの責任にされた。同じ時期に入社した大卒の男性が、すぐに新人記者として地方の局に配属されるのに対し、女性の新入りの仕事は男性記者たちの雑用係だったのだというのだ。ちなみに、週給五五ドルだった。

しかし、一九六二年に転機がやってくる。『ネーション』誌の編集長ヴィクター・ナヴァスキーの提案で、『ニューヨーク・ポスト』という夕刊紙のパロディを作ることになる。彼女がそこに寄稿したところ、当の『ニューヨーク・ポスト』の発行人ドロシー・シフがそのパロディ号を気に入り、書き手たちを試験採用することになったのだ。「パロディがつくれるなら、うちの新聞の記者にもなれるはずだわ。この人たちを雇いなさい」と女性発行人は言ったという。ノラ・エフロンはこうして試験的に採用され、地元ニュース面の部長から、コニー・アイルランドにある水族館の取材だったという。それは二頭のズキンアザラシの取材にしたのにお互いにまったたく関わりを持とうとしなかった。私は記事を書いた。笑える話だと思った。記事を渡した。地元ニュー

具体的に書け——作家としてのノラ・エフロン

スのデスクから笑い声が聞こえてきた。彼らも面白いと思っただらしい。私は常任記者の職を得た。こんなに嬉しいことはなかった。子供のころからの夢がかなったのだ。私は二十二歳だった」(I Feel Bad about My Neckより)。

二十二歳でスタッフ・ライターになったこともさることながら、最初の記事が笑える内容だったというのが、彼女のその後を予見しているようで面白い。彼女は、最初からユーモリストとして出発していたのだ。

彼女は、この『ニューヨーク・ポスト』紙でスタッフとして五年間記事を書きつづけ、その後『エスクァイア』誌や『ニューヨーク』誌や『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』などで活躍する売れっ子ライターになっていく。その意味では、ライターとしての彼女の基礎を作ったのが、この夕刊紙での記者時代だったと言える。

*I Remember Nothing*に収められた“Journalism: A Love Story”(ジャーナリズム:ある愛の物語)というエッセイは、そんな『ニューヨーク・ポスト』時代の思い出を生き生きと綴ったものだ。当時はまだインターネットなどはなく、新聞がマス・メディアの揺るぎない王様だった。そんな時代の、ただし一流紙とは言いにくい

新聞の活気に満ちた様子が魅力的に紹介されているのだ。

「エレベーターで二階に上がり、みすばらしい長い廊下を歩いて行き、社会部の部屋に入った。それはただ広い埃だらけの部屋で、汚れた窓の外はハドソン川に面していたが、窓の向こうが見えたわけではない」

「(社会部の) デスクは古く、椅子は壊れていた。みんながタバコを吸っていたが、灰皿は置かれていなかった。それで、吸いかけのタバコをデスクの隅っこにのせておくために、黒い焦げ跡が残るのだった。デスクは記者の人数分なかった。二〇年間も勤めているベテランでもなければ、記者には自分専用のデスクはなかったのだ。それどころか、引出しひとつなかった。座る場所を見つけるのは、椅子取りゲームさながらだった。窓が掃除されることはなかった……でも、こうしたこともまったく気にならなかった。私は人生の半分を新聞記者になりたいと思って過ごしてきて、やっとチャンスをつかんだのだから」

また、そこで働いていた記者についても回想している。

「私は『ポスト』紙を愛した。とにかく、そこは動物園みたいだった。編集長はセックスに関しては何食動物だった。経理部長は変人だった。記者の半数が酔っぱら

っているように見えるときもあった。だが、私はこの仕事が好きだった」

そして、彼女はここで文章の書き方を学んだと告白する。

「そこでの一年目に、私は書き方を学んだ。入社したときは、ほとんどわかっていたいなかった。編集者と校正係が私を導いてくれた。じっさいに、私に教育をさずけてくれたのだ。私はまず短い記事を書くように言われ、それからより長めの記事を割り振られ、その後で五回連載の記事を書くように指示された。実践を通して書き方を身に付けていき、しばらくすると、文章の構成が本能的につかめるようになった。素晴らしい校閲者のフレッド・マクモローは、赤の入った私の原稿を持ってわざわざやってきて、私の文章になぜ手直しが必要かを説明してくれた。そして彼は言った——絶対に記事を引用で始めるな、と。……また、本当に言いたいことを最後のパラグラフに書いてはいかん。スペースの都合で削られるに決まっているから、とも教えてくれた。また、特集記事のキャップで、ジョー・ラビノヴィッチという素晴らしい人がいた。彼はときおり私がかす文体上のやりすぎを注意してくれた。トム・ウルフが『ヘラルド・ト

リビューン』紙に記事を書き始めて、私が彼とまったく同じような文体で書こうとしたとき、その哀れな猿真似を諷めてくれたのは彼だった」

このようにして、ノラ・エフロンはこの新聞社で文章修行をしていったのだ。ヘミングウェイやリング・ラー・ドナーなど、新聞記者出身の作家がアメリカ文学界には多いけれど、彼女もまたそんな一人だったと言える。ちなみに、彼女の回想に出てくるトム・ウルフとは、言わずと知れた、一九六〇年代を席卷したニュー・ジャーナリズムの旗手のこと。『ザ・ライト・スタッフ』などで一時代を画したが、彼が文体の上でも同世代のライターに多大な影響力を持っていたことが彼女の回想からも伝わってくる。

先にも書いたように、当時の『ニューヨーク・ポスト』は決して一流紙ではなかったが、独自の社風を持っており、それが新米の女性記者には良かった面があったかもしれない。

「当時、ニューヨークには七つの新聞があった。販売部数から言えば、『ポスト』紙は七つのうちで最低だった」

「『ポスト』には必要最小限のスタッフしかいなかった

が、ニューヨークの他の新聞をぜんぶ合わせたよりも多くの女性が働いていた。たとえば、『ポスト』のリライト記者のなかで、もっとも優れていたのはヘレン・デューダーという女性だった。……何か事件が起こると、現場の記者が公衆電話から事件の詳細を報告してくる。それを、リライト記者が記事におこすのである。社会部の部屋は、印刷室のすぐ隣にあった。その騒がしい音ときたら——記者が打つタイプ、印刷室の自動植字機、電信受信機、それに輪転機のまわる音——まさにそれはジャーナリストの夢だった」

おそらく、発行人が女性だったせいだろうが、女性の記者が多かったという事実、そして活気に満ちていたと思われるその雰囲気——それは女性の新米記者が書き方を学ぶにはひとつの理想的な環境だった気がする。

それにしても、この最後の引用は、携帯電話はおろか、Eメールも、いやファックスすらもなかった時代の新聞記者の仕事ぶりを伝えて興味深い。また、最初のほうに引用した回想には、みんながタバコを吸っていたという話も出てきたが、これも隔世の感と言えるだろう。

3 具体的に書くこと——ライターとしてのノラ・エフロン

ノラ・エフロンは、その後はフリーのジャーナリストとなり、さまざまな新聞・雑誌を舞台に活躍することになる。さらに、当時ニュー・ジャーナリズムを牽引していた『エスクァイア』誌では、「女性に関するコラム」を連載し、人気を博するようになる。前者の記事は、彼女の最初の作品集である *Wallflower at the Oxy* (Bantam Book, 1970) に収められているし、後者のコラムは *Crazy Salad* (Pocket Book, 1984) とどうエッセイ集に収められている。前者は一九六〇年代の終りごろの記事が多く、後者は一九七〇年代前半から半ばにかけての記事を収めている。

ただ、この二冊の本は、内容的にかなり印象が異なると言える。 *Wallflower at the Oxy* (以後は、『乱交パーティ』での壁の花』と記す) では、いろいろな有名人を取材しているのだが、その顔ぶれはどちらかと言うと、あまりクールではない人たちだ。当時はさまざまな政治運動や文化革命があったけれども、それらとは無縁な人たちをあえて好んで取材している印象がある。『ラブ・ストー

リー』の著者エリック・シーガル、編集者のヘレン・ガリー・ブラウン、服飾デザイナーのビル・プラス、低予算旅行ガイドの著者アーサー・フロマー、ベストセラー作家のジャクリン・スーザン……あえてラジカルな運動家や思想の持ち主を避けているのではないかという感じがするほどだ。

たとえば、ヘレン・ガリー・ブラウン。日本ではあまり知られていないが、彼女は、何と言っても、“*lav-ing it all*” や “*mouseburger*” といった言葉を旗印にして、不振にあえいでいた女性誌『コスモポリタン』を復活させたことで有名な女性だ。一九六五年、当時、家庭総合誌だった『コスモポリタン』の編集長に抜擢されたブラウンは、これを独身女性向けの雑誌へと大胆に変身させる。キャリアやセックス・ライフなどの女性の悩みを、赤裸々にとりあげる編集方針に切り替えたのだ。また、ハリウッドの男性スターのヌードを載せるなどのスキャンダラスな紙面作りでも話題を集めた。こうして、ときには『プレイボーイ』誌の女性版と揶揄されながらも、発行部数が一〇〇万部を超える人気雑誌へと再生させるのだ。

ある意味では、彼女は悪趣味な編集者だったとも言え

る。それでも、彼女は女性運動とは別のレベルで、重要なメッセージを一般の女性に訴えていたと言える。たとえば、彼女の唱えた“having it all”（恋も仕事も何もかも）という言葉には、女性の人生の目的が家庭の主婦だった時代に、家庭だけでなく、キャリアや恋愛も実現可能だというメッセージがこめられていた。また、“mouseburger”（学歴も美貌も平凡な女性）には、学歴や美貌とは関係なく、女性は努力と機知で誰でも目標を達成することができるという信念がこめられていた。ブランドンは、俗物には違いなかったけれど、自分なりのやり方で女性読者を変化に向って扇動した女性だったと言える。ノラ・エフロンはそんな女性編集長を、多少の皮肉をこめながらも、魅力的に描き出している。（ちなみに、ヘレン・ガリー・ブランドンはその後三〇年間にわたって『コスモポリタン』の編集長を務めたあと、昨年の八月に亡くなっている）

『乱交パーティーでの壁の花』の記事は、このように、どちらかと言うと目立たないところで、人々に多大な影響をもたらした人物を取材によってレポートしている。決してヒップではない人たちを取り上げているところに、彼女のジャーナリストとしての独自のスタンスがある。

具体的に書け——作家としてのノラ・エフロン

るだろう。

一方、Crazy Salad（以下、『クレイジー・サラダ』）のほうは、当時の政治的な状況をより直接的に反映している本だ。「女性に関するコラム」ということで、とくにフェミニズムの影響のなかで、女性（また男性）が感じる不安や本音をユーモラスに拾い上げているという印象がある。この本でいちばん有名なのは、冒頭の「胸について」というエッセイだが、これは貧弱な胸に生まれてきた自分の半生を自嘲的に笑いながら、女性の意識が変わりつつある時代風潮を語った文章だ。また、「ファンタジー」というコラムでは、自分がよく抱く性的妄想をユーモラスに告白した上で、平等な男女関係が本当に起こりえるかどうかを論じている。時代の気分がよく伝わってくる本であり、一九六〇年代から七〇年代への時代のクロニクルとして読んでも興味深い。

二〇〇〇年代に、ノラ・エフロンはエッセイストとして活躍するが、その最近の彼女と、若いジャーナリスト時代の彼女には、明らかにスタンスの違いがある。ジャーナリストとしての彼女の関心が外の人々に向かっていているのに対し、エッセイストとしての彼女の関心は自分の周辺に注がれているということだ。これは、一九六〇

年代の後半から七〇年代の前半が激動の時代で、関心が外に向かわざるを得なかったのに対し、今の社会が内向きになったことと関連しているかもしれない。あるいは、二〇〇〇年代の彼女がすでにセレブになったため、自分のことを書くだけでも読者の関心をひきつけられると知っていたからかもしれない。

しかし、若いジャーナリスト時代にも、最近のエッセイストとしての彼女にも共通するスタンスがある。それは、彼女の文章がどこまでも具体的だという事実だ。たとえば、最近のエッセイで言えば、「盲目同然」は、加齢をめぐる文章だが、ノラ・エフロンは「老眼鏡」という具体的なアイテムに話題をしばって話を進める。あるいは、「私はハンドバッグが恨めしい」は、着る服にポケットがいっぱいある男性とは違って、いつも何らかのバッグを持ち歩かざるをえない女性の状況を嘆いた文章だ。つい何もかもバッグに入れてしまうので、肝心なときになって必要なものが見つからない哀れな経験をコミカルに綴ったその文章は、やはり、どこまでも具体的だった。そして、それが彼女の文章に説得力を与えていたと思う。

そういえば、在外研究でニューヨークに滞在していた

とき、大学の作文の授業や町中の創作学校の授業を覗いたことがある。教授や教師によって教え方やメッセージはさまざまだったけれど、彼ら（彼女ら）が判で押したように必ず言う決まり文句があった——“Be specific.”（あくまで具体的に！）だ。学生や受講者の提出した作文を教室で読み上げ、不満そうに肩をすくめては、彼らは参加者に向かってこの言葉を金言のように言うのだった。あまりにもこの決まり文句を聞かされたので、その当時は、他にもっと気の利いたアドバイスはないのだろうか、と不満に思ったものだ。

しかし、ノラ・エフロンの文章には、そういった金言が生かされているのを感じる。それは新聞記者時代に彼女が学んだジャーナリストとしての基本なのかもしれないが、彼女の文章は「あくまで具体的」なのだ。エッセイストとして身近な話題を語るときもそうだし、社会の激変を取材した若いころの彼女も同じだ。

たとえば、『クレイジー・サラダ』には、そんな彼女の特徴がよくあらわれた記事が収められている。一九七二年に行われたNWBBCの全国大会を取材した「マイアミ」¹⁾という文章だ。

当時は、ウイメンズ・リブがちょうどピークに達しよ

うとしていた時期だった（じっさい、翌年には、女性の中絶の権利を認める画期的な最高裁判決も出ることになる）。しかし、このとき、女性運動はすでに内部分裂の危機に瀕していたという。それまでウイメンズ・リブを先導してきたベティ・フリーダンがその影響力を失う一方で、新しい勢力が台頭していたのだ。その新勢力の中心メンバーが、グロリア・スタイネムだった。この年に女性誌『Ms.』を共同で創刊して有名になった女性で、『マリリン』（道下匡子訳、草思社刊）という秀作を後に書くことになるのだが、当時はむしろそのスタイルと美貌で知られる女性だった。片や、以前から女性運動のために戦ってきたが、やや時代と波長が合わなくなってきたフリーダン。片や、華やかな存在感で女性運動の新しいスポークスウーマンになるうとするスタイネム。この両者の確執を、その会場の雰囲気と共に、ノラ・エフロンは生き生きと描いている。

とくに、グロリア・スタイネムの人物描写が印象的だ。

グロリア・スタイネムは、昨年、完全な変身を遂げた。それは、彼女を嫌う面々を不安にさせずにはおかない変身だった。ジェーン・フォンダと同様、彼女は

恐ろしくなるくらい、畏怖を覚えるくらい、ひたむきな運動家に変わった。いまや彼女は自分を真剣に受け取ってほしいと要求している。これまで、彼女を過激な言動の流行に同調するセレブの二員ぐらいに片づけ、悪口を言ってきた面々にとって、これはとても認められない要求に他ならない。かつての華やかな女性——長い両脚、ミニ・スカート、マニキュアをほどこした長い爪、デイヴィッド・ウェブの指輪、ブッチ、グッチなどあれこれのブランド品で身を固めていた彼女、そして、かつてはゴシップ・コラムの常連で、次から次へと魅惑の男性との噂が絶えなかった彼女——そんな彼女がほとんど完璧な変身を成し遂げたのだ。今、彼女はリーバイスにシンプルなTシャツという出で立ちで、二日間同じ服を着ていることもしばしばある。爪こそ長いままだけれど、マニキュアはしておらず……

ノラ・エフロンは変身したスタイネムを、あくまでその外見から具体的に描いていく。そしてそのイメージ・チェンジの完璧さに舌を巻きながらも、どこか皮肉な視線で彼女を見てもいる。スタイネムの思想上の変身は、

もしかしたら、ファッションの流行と同じくらいに移ろいやすいかもしれないと読者に示唆しているかのようだ。そしてそれを、着ているアイテムを通して、「あくまで具体的に」伝えてるのが、彼女のジャーナリストとしての凄みだろう。

もちろん、ノラ・エフロンは当時の大きな政治運動についても書いている。しかし、具体的な細部への関心も持ち続ける。そのあたりのバランスの取り方が、いかにもジャーナリズムの伝統を感じさせるのだ。

そんな彼女の特質は、『恋人たちの予感』や『ジュリー&ジュリア』といった彼女の映画脚本の代表作にも流れていると思う。彼女の文章を読むたびに、アメリカの作文の授業で耳にした手垢にまみれた教訓も、決して無駄ではないのだと気づくのだ。

ノラ・エフロンの文章の翻訳は、そのユーモリストとしての特質が災いしてか、それほど多くはない。ただ、有名なコラム「胸について」は、常盤新平監修『「エスクアエア」で読むアメリカ(下)』(新潮社、一九八五)に小沢瑞穂訳で収録されている。また、昨年六月の彼女の急死を受けて、アメリカでは絶版だった彼女の本も再版されている。シナリオ・ライター志望でなくても、こ

の魅力的なユーモリストから学べることはたくさんあるのではないかと思う。